

【論文】

潜在的不登校生徒における友人関係認知の特徴について

山縣成美 ・ 東條光彦

(重井医学研究所附属病院) (岡山大学大学院教育学研究科)

本研究の目的は、主として対人関係認知スタイルと潜在的不登校の関係を明らかにし、その学校生活意識の特徴を把握することであった。1,129名(1年生男女186名,181名,2年生男女172名,199名,3年生男女151名,177名)の登校している中学生に対し、対人関係認知、自己肯定感、学校生活調査を実施したところ、他者を否定的に認知し、かつ他者の自分に対する思いも否定的であると認知している個人は、①学校嫌い意識を持ち、②新学期の始まる日や月曜日には学校へ行きたくないと思っており、早退をすることが多い。③学校行事、体育が嫌いであり、④学校で打ち込んでいるものはない、という学校生活意識を有していることが明らかとなった。

問題と目的

不登校傾向に関する研究では、“その特徴や背景要因を理解するため、学校生活に適応している児童・生徒の中に、その傾向を有する一群を見出し、一般児童・生徒との比較を行う研究”が増加している(小林,1994)。上記の「その傾向を有する一群」は、グレイゾーンもしくは不登校予備軍と呼ばれ、グレイゾーン(不登校予備軍)とは、継続的欠席には至っていないものの、学校へ行くのが嫌で遅刻や早退をするといった潜在的には登校拒否状態にある児童・生徒を指し、さらにその外層に、学校に行くのが嫌になったことがあるものの、長期欠席にいたらずに登校しているというもう一層のグレイゾーンあることが指摘されている(森田,1991)。不登校の児童・生徒の中には、突然欠席状態に至る者もいるが、多くはこのグレイゾーンのいずれかの段階から発展すると考えられる。したがって、不登校の兆候を早期段階で発見し予防する為には、このグレイゾーンの特徴と傾向を把握することが必要と言えるだろう。

先の定義にもあるように不登校の要因はさまざままで、なおかつそれらが複雑に絡み合っ

たという状態に至ると考えられ、いずれか一つに特定することは困難である。しかしながら、本人に尋ねた不登校のきっかけとしては「友人関係をめぐる問題」が圧倒的に多く全体の44.5%を占める(文部科学省,2001)。浅井・若林・鹿野(1999)は、潜在的登校拒否の調査研究の中でグレイゾーンの生徒の特徴として、「友人との付き合いに悩み、人とうまく関わることの苦手な消極的、内向的な性格傾向」が見られたとしている。一方で、友人関係は不登校を抑制する要因でもあることが指摘されており、登校拒否を抑制する説明変数として友人の重要性が明らかになった(たとえば古市,1997;浅井ら,1999など)。

ところで、対人関係認知には、他者評価と自己評価がある。他者評価は、対象となる対人関係の外部にいる第三者が評価することを言い、自己評価とは、対象となる対人関係に属す当事者自身が行う事を行う。従来この領域では、さまざまな研究が積み重ねられている。たとえば、山根(1987)は、対人関係認知の枠組みの一つとして、能動表出・能動表象・受動表出・受動表象の4側面が存在することを示した。これは、対人関係認知が、外顕的行動について

の認知（実際に表出される行動についての認知）と内潜在的認知（どのような気持ちを抱くかについての認知）との2層に分けられ、また、自分の反応についての能動的な認知と相手の反応についての受動的な認知との2方向に分けられることを示した。つまり、能動表出（自分の相手に対する外顯的行動に対する認知）、能動表象（自分の相手に対する内潜在的な反応についての認知）、受動表出（相手の自分に対する外顯的行動についての認知）、受動表象（相手の自分に対する予想される内潜在的反応についての認知）の4つの側面に分けられることを示した。さらに菊池・生月・山口・原野（1990）は、対人関係についての自己評価にも、これら4つの側面を挙げることが出来ることを示した。しかしながら従来の研究では、学校における対人関係を、多様な学校ストレスのひとつとして検討しているものや学校の楽しさに影響する要因として検討しているものが多く、子どもの対人関係認知の特徴についてまで言及した研究は見当たらない（山本ら、2000）。つまり、人とのかかわりの良否の認識は、「対人関係に関する認識スタイルによって異なる（山本・仲田・小林、2000）との指摘は興味深い。山本ら（2000）では、小・中学生の「対人関係認知スタイル」という対人関係認知の特徴を視座としてストレス反応や学校享受感の差異をより詳細に読み取り、不登校予防の支援の提案を試みている。そこでは、小・中学生の友人関係認知と教師関係認知は、学校享受感に対して直接に、また各種ストレス反応を経由して間接に影響を及ぼしていること。また、小学校では無気力、中学生では不機嫌・怒りのストレス反応が学校享受感にネガティブな影響を及ぼしていること。さらには、小学生では、友人関係認知の能動的側面や教師関係認知の受動的側面をネガティブに認知している児童は、不機嫌・怒りや無気力といったストレス反応を表出し、中学生で友人関係認知の受動的側面をネガティブに認知している生徒は、学校享受感が低く、また抑うつ・不安や無気力といったストレス反応を表出するといった点が明らかに

されている。

しかしながら山本ら（2000）では、学校忌避傾向の直接的指標を取り扱っているわけではなく、その意味で不登校傾向の早期把握やそれらの特徴を有する生徒の同定が間接的に視点とどまっているといえる。そこで本研究では、潜在的な不登校群における自己肯定感と対人関係認知スタイルの特徴を把握することを目的とする。

方法

1. 対象

西日本の公立中学校に通う1,2,3年生の男女生徒、計1,129名（1年生男女186名、181名、2年生男女172名、199名、3年生男女151名、177名、不明63名）である。

2. 調査方法

以下を含む調査は無記名で、学年と性別の記入のみ求めた。担任教師の監督の下、各学級で一斉に行われた。なお、調査の実施にあたっては、回答が任意であること、途中で中止も可能であること、不参加による不利益はないこと、データの匿名性は保証されていることが説明され、文書により同様の趣旨の説明が表紙に記載された。

1) 潜在的な不登校傾向に関する調査

浅井ら（1999）の「学校生活調査の質問項目」を、ワーディングについて再検討の上使用した。

2) 自己肯定感

久芳ら（2005）の「自己評価」尺度を使用した。本尺度は、全8項目で4件法である。自己肯定感が高いほど、得点が低くなるように得点化した。

3) 友人関係認知スタイル

菊池ら（1990）が作成した「対人関係認知尺度」を小・中学生理解可能に改編した山本ら（2000）を使用した。本尺度は、友人、教師に対してそれぞれ4項目ずつあり、5件法で回答を求めた。

結果

(1) 自己肯定感得点の性差・学年差

に、性差と学年差が存在するか検討する為に、自己評価の総合得点を従属変数として性と学年を要因とする2要因の分散分析を行った。その結果、性別と学年の主効果と交互作用がみられた為、Bonferroniによる単純主効果の検定を行なった。その結果、男子においては3年生が1,2年生よりも自己肯定感得点が有意に高く ($F(2, 1002)=14.46, p < .001$), 女子においては自己肯定感得点の有意な差は見られなかった。また、性差が1年生 ($F(1, 1002)=53.96, p < .001$), 2年生 ($F(1, 1002)=38.29, p < .001$)に見られ、どちらも男子の平均値が女子よりも有意に高かった。女子においては、学年の単純主効果は見られなかった (Table 1)。

(2) 認知スタイルによる自己肯定感得点の相違

| | | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 学年差 F-value |
|---------------|------|----------|----------|-------|-------------------------|
| 男子 | N | 160 | 166 | 150 | 14.48*** 1年生,2年生<3年生 |
| | MEAN | 17.54 | 18.82 | 20.59 | |
| | SD | 5.27 | 4.97 | 5.77 | |
| 女子 | N | 171 | 189 | 172 | 2.08 |
| | MEAN | 21.58 | 22.12 | 21.04 | |
| | SD | 4.96 | 4.57 | 5.59 | |
| 性差 F-value | | 53.96*** | 38.29*** | 0.65 | |
| | | 男子<女子 | | 男子<女子 | |

*p<.05,**p<.01,***p<.001.

| | | 自他肯定 群 | 自己肯定 群 | 他者肯定 群 | 自他否定 群 | F検定 |
|---------------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 自己肯定感 総合得点 | N | 616 | 77 | 95 | 215 | F=51.94 |
| | MEAN | 18.94 | 20.86 | 21.18 | 23.7 | df=3 |
| | SD | 4.9 | 4.66 | 4.82 | 4.95 | p<.001 |

| | | 自己肯定感総合得点 |
|-------------|---|-----------|
| 自他肯定群:自己肯定群 | * | 自他肯<自己肯 |
| 自他肯定群:他者肯定群 | * | 自他肯<他者肯 |
| 自他肯定群:自他否定群 | * | 自他肯<自他否 |
| 自己肯定群:他者肯定群 | | |
| 自己肯定群:自他否定群 | * | 自己肯<自他否 |
| 他者肯定群:自他否定群 | * | 他者肯<自他否 |

*p<.05

次に、個人の対人認知スタイルを特定するため、山本ら(2000)に従い、友人関係認知尺度、教師関係認知尺度得点について、能動的側面得点(項目1+3)、受動的側面得点(項目2+4)を算出し、男女別に以下の4群に分類した。

- 自他肯定群:能動的側面得点が平均値+0.5SD以下、受動的側面得点も平均値+0.5SD以下である群。この群の特徴は、自分は相手(友人または教師)を肯定的に認知し、かつ相手の自分に対する思いも肯定的だと認知している点にある。
- 自己肯定群:能動的側面得点が平均値+0.5SD以上で、受動的側面得点は平均値+0.5SD以下である群。この群は、自分は相手を否定的に認知しているが、相手の自分に対する思いは肯定的だと認知していることを特徴とする。

●他者肯定群:能動的側面得点が平均値+0.5SD以下で、受動的側面得点が平均値+0.5SD以上である群。この群では、自分は相手を肯定的に認知しているが、相手の自分に対する思いは否定的だと認知していることが特徴である。

●自他否定群:能動的側面得点が平均値+0.5SD以上で、受動的側面得点も平均値+0.5SD以上である群。この群は、自分

は相手を否定的に認知し、かつ相手の自分に対する思いも否定的であると認知している。

さらに、自己肯定感に対人関係認知スタイルによる差が存在するか検討するため、対友人関係認知において自己肯定感の総合得点を従属変数として一要因分散分析を行った。その結果、両対人関係認知において対人関係認知スタイルによる差がみられた(Table 2)ので多重比較を行った。その結果「自他肯定群と自己肯定群」、「自他肯定群と他者肯定群」、「自他肯定群と自他否定群」、「自己肯定群と自

他否定群」,「他者肯定群と自他否定群」の間に、有意な差がみられた(Table 3)。

(3) 潜在的な不登校群について

① 出現率

まず、潜在的に不登校の傾向があると思われる生徒を特定するため、浅井ら(1999)に従い、学校意識調査の質問項目2「学校は好きですか」、質問項目11「学校で嫌いな授業や行事がある日は、学校へ行きたくないと思うことがありますか」、質問項目12「新学期の始まる日や月曜日は、学校へ行きたくないと思うことがありますか」の3項目全てに対し、質問2に対しては「どちらかといえば嫌い」もしくは「嫌い」を選択、質問11,12に対しては「時々ある」もしくは「よくある」を選択した者を抽出した。

その結果、本研究において、潜在的な不登校群と判断されたのは、1,129人中125人であり、その出現率は11.1%であった。浅井ら(1999)では、同様の算出方法での出現率が14.3%であり、この数字に比べると本研究での出現率はやや低いものとなった。

② 潜在的な不登校群の特徴

本研究では、各対人関係認知において、潜在的な不登校群の出現率が最も高い認知スタイル(自他否定型)の生徒を、不登校リスクの高い「潜在的な不登校群(n=56)」とした。

a. 学校生活調査における特徴について

潜在的な不登校群の指標とした3つの項目に対する結果は、以下の通りであった。質問2「学校は好きですか。」に対する回答(Table 4)では、学校を「嫌い」(嫌いor やや嫌い)とする生徒が潜在的な不登校群に有意に多かった($\chi^2=124.916$, $df=3$, $p<.001$)。質問11「学校で嫌いな授業や行事があ

| | a.好き | b.やや好き | c.やや嫌い | d.嫌い | 人(%) |
|-----|----------|-----------|----------|----------|------|
| 一般群 | 33(20.1) | 102(62.2) | 23(14.0) | 6(3.66) | 164 |
| 潜在群 | 0(0.0) | 0(0.0) | 31(55.4) | 25(44.6) | 56 |
| 計 | 33 | 102 | 54 | 31 | 220 |

| | a.ない | ほとんどな | c.時々ある | d.良くある | 人(%) |
|-----|----------|----------|----------|----------|------|
| 一般群 | 38(23.2) | 46(28.0) | 62(37.8) | 18(11.0) | 164 |
| 潜在群 | 0(0.0) | 0(0.0) | 19(33.9) | 37(66.1) | 56 |
| 計 | 38 | 46 | 81 | 55 | 220 |

| | a.ない | ほとんどな | c.時々ある | d.良くある | 人(%) |
|-----|----------|----------|----------|----------|------|
| 一般群 | 53(32.3) | 51(31.1) | 43(26.2) | 17(10.4) | 164 |
| 潜在群 | 0(0.0) | 0(0.0) | 16(28.6) | 40(71.4) | 56 |
| 計 | 53 | 51 | 59 | 57 | 220 |

る日は、学校へ行きたくないと思うことがありますか。」に対する回答(Table 5)では、学校へ「行きたくない」(時々あるor 良くある)と回答した生徒が潜在的な不登校群において有意に多かった($\chi^2=79.541$, $df=3$, $p<.001$)。そして、質問12「新学期の始まる日や月曜日には、学校へ行きたくないと思うことがありますか」に対しては、「ある」(時々あるor 良くある)と答えた生徒の比率(Table 6)は、潜在的な不登校群において有意に多かった($\chi^2=95.675$, $df=3$, $p<.001$)。

さらに、潜在的な不登校群の指標以外に、学校生活調査において潜在的な不登校群が一般群に比べて有意に多く選択した項目はTable 7のとおりであった。特に「学校で打ち込んでいるものはない」「精神的理由で遅刻した」「精神的理由で保健室に行った」などの各項目における差異は、登校しつつも欠席に傾斜しがちな生徒の心的、行動的特徴をよく示

Table7 対友人関係認知における潜在的不登校群の特徴

| 質問項目 | 潜在群(N=56) | 一般群(N=164) | 人(%) | χ^2 検定 |
|--|-----------|------------|------|--------------------|
| 3 学校で打ち込んでいるものはない | 19(33.9) | 27(16.5) | | $p < .01^{**}$ |
| 5(a) 欠席日数は0日 | 20(35.7) | 87(53.0) | | $p < .1^{\dagger}$ |
| 5(b) 精神的理由で欠席した | 6(10.7) | 4(2.4) | | $p < .01^{**}$ |
| 6(b) 精神的理由で遅刻した | 4(7.1) | 1(0.6) | | $p < .01^{**}$ |
| 7(a) 早退回数0回 | 29(60.4) | 125(76.2) | | $p < .01^{**}$ |
| 8(b) 精神的理由で保健室へ行った | 4(7.1) | 2(1.2) | | $p < .05^*$ |
| 9 体育は嫌いである | 26(46.4) | 40(24.4) | | $p < .01^{**}$ |
| 10 学校行事は嫌いである | 36(64.3) | 38(23.2) | | $p < .001^{***}$ |
| $\dagger p < .1, *p < .01, **p < .05, ***p < .001$ | | | | |

がある」、「自分には誰にも負けないもの(こと)がある」「自分には自分らしさがある」「今の自分が好きだ」で潜在的不登校群が有意に一般群よりも否定的に認知していた。このことから、

しているといえるだろう。

考察

本研究の目的は、対人関係認知スタイルによって自己肯定感にどのような相違がみられるか検討するとともに、潜在的不登校群における自己肯定感と認知スタイルの特徴を把握し、その学校生活意識の特徴を把握することであった。

本研究において潜在的不登校群とは、学校意識調査のうち「学校は好きですか」、1「学校で嫌いな授業や行事がある日は、学校へ行きたくないと思うことがありますか」、「新学期の始まる日や月曜日は、学校へ行きたくないと思うことがありますか」の3項目全てに対し、学校嫌い意識を示した者のことを指す。本研究において、潜在的不登校群の出現率は、11.1%であった。浅井ら(1999)での潜在的不登校群の出現率は、14.3%であり、本研究での出現率はやや低いものとなった。浅井ら(1999)の調査が行われた1996年と本研究の調査の間には約15年の歳月があり不登校生徒数も約2万5千人の増加がみられる。また、浅井ら(1999)の研究が実施された愛知県と比較すると岡山県の不登校児童・生徒出現率は高い。その中で出現率の低下がみられたのは、不登校の地域性や学校色が関係しているのかもしれない。

また対友人関係認知において、潜在的不登校群の出現率が最も高い認知スタイルの生徒を、不登校傾向の高い潜在的不登校群とし、その特徴を検討したところ、潜在的不登校群の全体的自己肯定感は、一般群と比較して有意に低く、「自分には良いところ

潜在的不登校群は自己を評価する視点の中でも比較的抽象的な項目を低く認知していると言える。成績や運動の出来は実際に数値化されて表れるので認知しやすいが、「自分らしさ」や「自分の良いところ」は目に見えないものであるため、具体的事象に対する評価を総括し自己像を内省的に構成していくという過程が十分ではないのかもしれない。

また、対友人関係認知における潜在群には、①学校嫌い意識を持ち、②新学期の始まる日や月曜日には学校へ行きたくないと思っており、早退をすることが多い。③学校行事、体育が嫌いであり、④学校で打ち込んでいるものはない、という生徒像が浮かび上がった。

学校行事や体育は、通常の授業とは異なり生徒同士におけるコミュニケーションの自由度が高い集団活動である。そのような場では自他否定群は、自己・他者に対する否定的な認知が、友人関係における相互作用を滞らせ、生徒同士の関わり合いに支障をきたし、さらなる体育嫌い・行事への苦手意識を形成したのであろう。学校行事・体育嫌いの潜在群の有意差は浅井ら(1999)でも同様の結果となっており、人とかかわることの苦手な、消極的、内向的性格傾向を向うことができたとしている。また、自他に対する否定的な認知は何か打ち込もうとする姿勢にも影響を及ぼし、学校で打ち込んでいるものはないという結果を導いたと思われる。

以上を踏まえると、潜在的不登校傾向を有する生徒は、友人関係を否定的に認知しており、自己肯定感が低い。思春期の児童・生徒の自己評価に大きく影響するのは友人関係であること、友人関係が良好

でないと感じる生徒は「学校が嫌だ」と感じる傾向が高いこと(山本ら, 2000)を報告しており, 本研究もそれらに合致する結果となった。一方で, 前述の通り, 友人の存在は不登校の抑制要因としての可能性が指摘されている(たとえば古市, 1997, 浅井ら, 1999) ことを踏まえると, 友人関係が良好であることが, 学校魅力の一つとして生徒を学校に引き(惹き)つける力をもっているといえる。よって今後は, 自他に対し否定的な認知の特徴を持っている生徒が友人関係を肯定的に認知できるような援助や, 良好な友人関係を形成する為の援助を検討していく必要があるだろう。

さらに大前(1998)は, 中学生の学校適応感に関する因果モデルを構成する研究において, 中学生が学校生活を充実したものと認知するためには, 教師との良好な関係が必要であることを指摘している。このことは, 友人関係のみならず教師との関係が不登校の形成要因かつ抑制要因として機能していることを意味し, 今後収集されるべき重要な情報となるだろう。

参考文献

- 浅井聖子・若林慎一郎・鹿野輝三 1999 潜在的不登校拒否の調査研究 金城学院大学研究所紀要, 33(1), 1-10.
- 古市裕一 1997 小・中学生における学校生活の楽しさとその規定要因 日本教育心理学会総会発表論文集 (39), 248.
- 菊池陽子・生月誠・山口正二・原野広太郎 1990 対人関係認知と対人イメージとの関係についての研究 カウンセリング研究 23, 171-178.
- 小林知博 2002 自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応 対人社会心理学研究(2), 35-43.
- 久芳美恵子・齊藤真沙美・小林正幸 2005 中学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について 東京女子体育大学紀要, 40, 19-28.

- 文部科学省 2001 不登校に対する実態調査
- 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学, 学文社
- 大前泰彦 1998 中学生の学校適応感に関する研究 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 8, 33-
- 山本淳子・仲田洋子・小林正幸 2000 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連 ―学校適応予防の視点から― カウンセリング研究, 33(3), 235-248.